

老いの中の光と影 : 日本の現代文学から見る

著者	綾目 広治
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要. 外国語・外国文学編, 文化学編, 日本語・日本文学編
巻	38
号	1
ページ	88-101
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000129/

老いの中の光と影

— 日本の現代文学から見る —

綾目 広治[※]

Light and Shadow in Aging : in Japanese Contemporary Literature

Hiroharu AYAME

[要旨]

近代社会においては、一般に老いは否定的に捉えられてきた。それは老いることが生産年齢からの脱落を意味しているからであるが、他方では老いは超俗的な境地にいたるものとしても捉えられていた。それらの意味において、老いには正負の両面があるというイメージがあったが、しかしそのイメージは老いの実態とかけ離れたものであることが、深沢七郎や谷崎潤一郎、さらには川端康成の文学から見ることができる。それらの小説の主人公たちは健康であり、性的にも旺盛な活力を持っていて、決して超俗的ではない。瀬戸内寂聴や田辺聖子の、老人を主人公にした小説に登場する女性たちは、いずれも老いてなお人生に対して前向きで積極的であり、老いの境涯を十分に楽しんでいて、彼女たちは理想的な老いを生きていると言える。そこにはあり得べき老いの姿がある。

小説においては、男性よりも女性の方が、老いにおける強い生き方を示していると言えるが、そのことを逆に、すなわち老いにおいて弱いのは男性であることを端的に表している小説が渡辺淳一の『孤舟』である。ただし、作者はそのことを批判的に捉えることをしていない。また、佐江衆一の『黄落』や耕治人の『そうかもしれない』には、老人介護にある問題が語られている。さらに、老年期にも恋愛があるのは異常ではなく、そこには純愛の形で進行する関係もあることを、黒井千次の『高く手を振る日』は語っている。老いにおける光と影の複雑な様相を現代文学から知ることができる。

1

明治以降の日本の近代社会においては長らく、老いということ、あるいは老人というものとは肯定的に扱われてこなかったと言える。老人は言わば生産年齢を過ぎていて、したがって社会にとって、少なくとも経済社会にとっては不要な存在として位置づけられてきた。もちろん、老人にはあるはずだと考えられている、多くの体験から得た知識や知恵から、社会の人びとが学ぶという面も無くはなかったわけだが、日進月歩で進歩する技術などに

キーワード：老い、日本現代文学、女性

Key Words : Aging, Japanese Contemporary Literature, Women

※ 本学文学部日本語日本文学科

老人たちは遅れがちであり、彼らの知識や知恵というものも、技術的に高度に進歩してきた現代社会には役立たずのものになっていると見られ、もはや彼らからは何も学ぶことは無いというわけである。そういう近代社会の風潮を、時代を近代ではなく、それ以前の時代に設定して、いわゆる姥捨伝説を小説化したのが、深沢七郎の『楢山節考』（『中央公論』、1956・11）である。小説中に「天保銭」のことが書かれているから、時代は江戸時代の後期だと考えられる。

山間の貧しい村は食糧が乏しく、老人は70歳になると楢山に捨てられるのが村の掟であった。物語の最初の時点ではおりんは69歳だとされている。おりんはずっと前から70歳になれば「楢山まいりに行く気構え」をしていたのであるが、息子の辰平も再婚した嫁も（一度目の妻は病死している）、年齢の割に元気なおりんを捨てることに気が進まなかった。しかし、おりんは丈夫な前歯を自ら火打ち石で叩いて砕き、それによって歯が欠けたことを老いたことの証として、70歳になれば自分を楢山に行かせようとする。結局、おりんが70歳になった年に、辰平は村の掟と作法に則り、おりんを背負って楢山に踏み入る。「岩があると必ず死体があつた」という山中を辰平は歩いて行き、そしておりんを一人置いて楢山の中腹まで下って来たときに、雪が降り始める。雪が降ると、雪は山に捨てられた老人を眠らせて凍死させるから、雪が降り始めたのはおりんにとって幸運だったわけである。村の掟に従うなら、辰平は捨てたおりんのいる場所に戻ってはならないのであったが、辰平は雪が降ったことが嬉しくて、座っているおりんが見えるところまで戻って、「おつかあ、ふんとに雪が降つたなァ」と声を掛けるのである。

この雪の場面が感動的なところであるが、おそらく作品発表当時の読者は「楢山節考」を、生活の必要がすべての感傷さらには感情を優先する、前近代的な貧しい村落社会の慣習が描かれた小説として読んだと思われる。そして、これは昔の話なのであって、ヒューマニズムを基調とする近代以降の社会ではあり得ないことだ、と。たしかに、そのものズバリの姥捨は近代以降の社会では無いであろうが、しかし形を変えた老人遺棄の問題は豊かになった近代以降の社会においても厳然とあると言える。生産、効率などの経済性を優先する近代以降の社会の中では、老いや老人というものは負（マイナス）の存在として扱われて、老人は社会的には遺棄されている面があると考えられる。もっとも、「楢山節考」にあるのはギリギリの貧しさがもたらす過酷さであり、それに対して近現代の社会は経済性を優先させて豊かさを守ろうとするとところから老人に過酷であるという違いはある。しかし、ともに経済が決定因となって老人を遺棄するという点では同じだと言える。だから、この物語は、過去の話としてだけでなく、戦後当時の日本社会にも通じる話として提出されたと読むべきである。

こう見てくると、『楢山節考』は老いや老人という存在がマイナスのものとして描かれた小説であると言えよう。まず、このことを指摘しておきたい。

次に、老人や老いそのものがマイナスなものとして描かれたわけではないものの、しかし結果的には老いがやはり好ましくないものとして描かれているのが、あるいは読者がそのように受け取ったのが、谷崎潤一郎の『瘋癲老人日記』（『中央公論』、1961・11～1962・5）である。執筆当時、作者の谷崎潤一郎は76歳であった。

この小説の主人公で語り手でもある卯木督助は、「生キテキル限りハ異性ニ惹カレズニハキラレナイ」と思っている77歳の老人で、彼にとって性とは、迫ってくる死の予感に

対抗して生命力をかきたてるものであった。その対象に選ばれたのが、自分の息子の嫁のさつ颯子で、彼女は結婚前は日劇のダンシング・チームに属していたとされており、颯子はタイプとしては『痴人の愛』のヒロインの、あのナオミと同類型の女性である。督助が颯子を性的対象とするとしても、言い換えれば颯子を相手とするのが彼の性生活だと言っても、実際は彼女の足指をしゃぶるという快樂しかないわけであるが、それでも「恐怖ト、興奮ト、快樂トガ代ル―胸ニ突キ上ゲタ」と日記に記すような性的興奮を督助は感じる。この小説には、谷崎潤一郎における母恋のテーマも流れていて、ある夜督助は母親の夢を見る。その母親が美しく、また彼女が素足であったことを思い出して、今度は颯子の足の仏足石を作って、自分の死後に自分の骨をその仏足石の下に埋め、死んでも自分の骨が颯子の足に踏まれることを幻想する。そして、こう日記に書く、「死ンデモ予ハ感ジテ見セル。感ジナイ筈ガナイ」、「痛い、痛い」、「痛イケレドモ楽シイ、コノ上ナク楽シイ」、と。

〈何をか言わんや〉という思いもするが、谷崎潤一郎は本気でこの物語を書いているのである。同じように、谷崎潤一郎が老年の性、あるいは性の執着を描いたのが、それよりも約十年前に書かれた『少将しげもと滋幹の母』（『毎日新聞』、1949・12～1950・3）である。

この物語は、時代は平安時代で、時の権力者である左大臣藤原時平が大納言藤原国経くにつねの若くて美しい妻、北の方を奪う話が主筋の一つであり、国常はもう80歳近い老人であったが、50歳以上も離れた若い妻を持っていた。美しいという評判のあった北の方に、以前より目を付けていた時平は、年賀の酒宴の席で饗応の引き出物として国経から北の方を奪う。国常は時の権力者に逆らえなかったわけである。その後、国常は北の方のことが忘れられず苦しむことになる。国常はその後3年半を生きるが、ここで面白いのは国常が北の方への恋慕の情を何とか捨てようとして、「不浄観」を行うことである。「不浄観」とは、人間の官能的快樂が一時の迷いに過ぎないことを悟るために、腐乱した死体などを見ることによって、美しいと思っていた人も死ねば誰しもいずれはこうなるのだと思って、今の執着を断ち切ろうとすることである。こうまでしなければ、国常は北の方への執着を抑えることができなかったわけである。国常は毎夜、墓場に行ってそれを行う。しかし北の方への愛執は断ち切りがたく、結局は懊悩の内に死ぬ。

この小説にはやはり北の方を恋慕していた平中の話があったり、また北の方と国常との子どもである滋幹が、ずっと後に北の方と再会するという、やはり谷崎潤一郎の文学にある母恋のテーマも、もう一つの主筋としてある。ただ、ここでは、北の方への国常の愛執に注目したい。これも、老人には無い、あるいはあるはずがないとされていた、老人における性の執着の問題が書かれているのである。とくに「不浄観」を行わざるを得ないほどの性的執着があったというところに驚かされるが、おそらくこの小説が発表されたときには、本来的に性的執着心が強い、いかにも谷崎潤一郎的な小説として一般には読まれたのではないかと思われる。つまり、特殊谷崎的な世界の話である、と。しかし案外、当時すでに老年期に入っていてこの小説を読んだ人たちは、〈わからなくはない〉と思った人も多かったかも知れない。そういう声は小さく囁かれたであろうから、周囲にはほとんど聞こえなかったであろうが。

老年期の性を扱った文学者としては、谷崎潤一郎の他にも有名な文学者として川端康成がいる。『眠れる美女』（『新潮』、1961・1～11）がその種の小説である。これは、67歳になる江口老人が、海近い別荘風の家で眠っている若い女性にただ添い寝して一夜を過ご

すという話を語った小説である。その家の二階の一室に眠り薬で眠らされた若い女性が裸体で横たわっているのだが、その横に性的能力を失った、すなわち「安心できるお客さま」である男性老人たちが訪れるわけである。これは秘密が守られている一種の遊びであるが、そこを訪れる男性の老人にとっては、この家は若い女性とともに眠るということ自体が最高の喜びであるという彼らの願望を叶えてくれる場所であった。添い寝すること自体、彼らにとっては性の喜びであったということである。あるいは一種の回春剤であったと言えるか。江口老人はその家に5回通っていて、一夜ごとに違った娘が眠っていた。江口老人は、眠れる美女の横でその娘に触発されて、昔の恋人たち、自分の娘や母のことなど、彼が関わった女性たちのことを思い出す。物語の中心は、その思い出の叙述にあり、女たちへの哀れみや慈しみや悲しみが語られるのである。

老人の性を扱った小説としては、先ほどの谷崎潤一郎のものがどこか明るく、見方によっては滑稽感さえなくはないのに対して、川端康成のものは陰気で少々薄気味悪くもあると言える。しかし、そういう違いはあるものの、川端康成も谷崎潤一郎も、老いと性の問題を正面から描いたわけで、今日から振り返ってみると、その先駆性というのを感じ取ることができる。当時もその後もしばらくは、それらの小説は異常な人間たちのことを描いた小説、あるいはいかにも谷崎の川端的な、あくまで特殊な世界が展開されていると思われてきたのではないかと考えられる。

しかし、老人ホームなどで老人たち同士の恋愛問題が頻繁に起こっているという報道などもあって、その恋愛問題は特別異常なことではないのだということがわかってくると、谷崎潤一郎も川端康成も決して異常な世界を描いたのではないということが、改めて認識される。しかし、発表された当時は、性的関心が希薄になるのが老人であって、性への執着を持つ老人は特別に色ボケだ、というふうに思われていたのではないかと考えられる。だからこそ、谷崎も川端もそういう世間の常識に対して異議申し立てをしたのではないかととも思われる。もっとも、そういう世界が彼らの好みに合っていたからとも言える。それにしてもそういう小説が極めて特異で異常だ、というふうに見られていたということは、老いと性とは——この場合の性というのはプラトニックな恋愛も含めてのものであるが——似つかわしくないものである、という通念がやはり支配的であったということである。別の言い方をすると、老人は性的な執着や欲望などから脱けきって、そういう世界から言わば解脱しているのが当然だ、とする考え方が普通であったということである。悟りにまでは至らないまでも枯淡の境地が老人には相応しいとする考え方である。

したがって、恋愛や性愛という問題は、老人が主人公の小説には不似合いであるというのが一般通念であったわけである。しかし、果たしてそうであろうか。

2

老いの問題を論じた古典的名著と言っていい著書にシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『老い』上・下（原著出版は1970年、朝吹三吉訳、人文書院、1972・6）がある。その中でボーヴォワールは、「(略) 老いが心の明澄をもたらすという偏見は徹底的に排除されなければならない」と述べている。年を重ねて老齢になるにしたがって、人は激しい情念や欲望から解放されて、明澄な心を持ち平静な幸福感に浸ることができるというのは嘘だ、と言っているわけである。年を取れば欲望や情念から自然と解放されるということはないと言うので

ある。そして、こうも語っている、「われわれの時代にとくに発達した一つの神話がある、すなわち、高齢に特有の超俗デタシユマンという神話だ」、と。つまり、老いると脱俗あるいは超俗の境地に至るとするのは、あくまで「神話」であるということである。あるいは、そうあって欲しいという人びとの願いとも言えるであろう。東洋においてはそのような言わば枯れた境地が良しとされる考え方があるが、ヨーロッパでもそのようである。しかし、実際はそうではないわけであって、先に見た、谷崎や川端の晩年の小説はそうではないということをよく語っていた。

また、ボーヴォワールの『老い』は厳しい現実も語っていて、近代以降の社会について、「それは発展と豊富という神話の背後にかくれて、老人をまるで非人バリアのように扱う」、と述べている。ずっと昔の、進歩がほとんど無い停滞した社会では、老人の知恵は尊重されて老人は敬意をもって遇せられていたのだが、近代以降の社会では、つまり不断に進歩し若返る社会では、それについて行けない老人は「まるで非人バリアのように」扱われるわけである。むろん、年を取れば変化に弱くなるのは普通であるし、技術の発展などでは若い人たちに遅れるのはやむを得ないであろう。しかし、このような進歩に遅れるという問題はともかくも、老人たちも「高齢に特有の超俗デタシユマンという神話」によって、悟ってもいないのに悟ったふうな顔をしようとするところに問題がある。まずその「超俗デタシユマンという神話」から老人たち自身が抜け出すことが必要なのではないだろうか。実は、比較的近年ではそれから抜け出した老人たちが主人公の小説が出てきていて、たとえば瀬戸内寂聴の小説『いよよ華やぐ』上・下（新潮社、1999・3）がそうである。

これは藤木阿紗という91歳の女性、浅井ゆきという84歳の女性、杉本珠子という72歳の女性たちが主人公の小説で、中でも阿紗が中心人物と言える。阿紗は「なぎさ」という呑み屋を経営していて、また俳人としても高く評価されている女性であり、ゆきは着物研究家として知られる女性でテレビに出たりもしている。珠子は「ペペ」というクラブをやっていて、3人は仲良しで一緒に温泉旅行などもする。他に、阿紗の娘で薫という60歳過ぎの女性も主な登場人物である。薫は大阪で高級な食器類の店を経営していて、彼女の選ぶ品物は好事家の間で次第に評判になっていって、今ではれっきとしたブランドになっているとされている。

この小説は、3人の老女のそれぞれの過去が語られながら現在の物語も進行していくという展開になっていて、その3人の過去とはつまるところ男性との関係の話である。阿紗は2度結婚したことがあり、最初の夫とは相思相愛で結ばれたのであるが、その男性は事業で失敗し妻子を捨てて蒸発してしまう。2度目の夫は阿紗の姉の死後に阿紗がその後釜として嫁ぐことになった男性で、とくに阿紗は彼を愛していたわけではなかった。実は2度目の夫と結婚した翌年に、阿紗は別の男性と熱烈な恋をする。この男性は最初の夫の教え子であり、阿紗よりも7歳年下の男性であった。この恋はその後40年近く続いた。このように、物語は主に阿紗の男性との関係という過去の話が語られるが、浅井ゆきと杉本珠子にもそれぞれ男性との関係があり、阿紗の過去とともに彼女たちの過去も語られるという小説である。阿紗の娘である薫も過去に2度の離婚歴があるとされているが、ただ薫の過去、とくに男性との過去については深く語られてはいない。

この小説で驚くのは、70代、80代、そして阿紗に到っては90代なのだが、彼女たちが元氣よく今なお現役で働いていることである。もっとも、とりわけ最高齢の阿紗は老いを

意識しないわけではない。夜寝るとき、阿紗は「このまま眠って、翌朝も目を覚まさないで死のお迎えということか。それなら最高の死に方だと思う」ということが、毎夜彼女の頭をかすめるようで、また、「(略)でもね、この年になると、毎年、この桜は今年こそが見おさめかなとか、名月は、来年は見られないかななんて、ちらっ、ちらっとよぎるんですよ」とも語っている。91歳だから当然であろうが、しかし阿紗の素晴らしいところは、先ほどの言葉に続けてこう語っているところである。「ですから、森羅万象が、何でもかんでも、みんなしみじみなつかしいの、それに人もね」と。今年が最後かも知れないというので、憂愁に沈むのではなく、目に見えるもの接する人が懐かしく、おそらく美しく見えるからこそ、感動があり、それがまた生きていく力になっているのであろう。だから、いつも目に触れるものや接するものなどが新鮮な感動を阿紗に与えてくれるわけである。そういうふうには阿紗はまさに「森羅万象」と付き合っているのである。

物語の中でこういう会話の場面がある。「生きていたら、まだまだどんな珍しいものや美しいものに出逢うか、わからないのねえ」／感慨深げにつぶやく阿紗に、／「そうねえ、もうたくさんと思ってても、まだどんな人との出逢いがあるかも知れないわねえ」／と、珠子が神妙に相槌を打つ、と。やはりこれは新しいものへの好奇心と言えよう。阿紗の娘の薫はその3人の女性についてこう思う。「三人とも、格別の体力と、若い心の持主だからと考えてみても、やはりあの好奇心と、身についた前向きの生き方には感嘆せずにはいられない」と。また、その3人の内の珠子も阿紗にこう語っている。「恐れ入りました。女将さんの若さの秘密がわかったわ。その好奇心ね」と。

ところで、先ほども言及した『老い』の中で、ボーヴォワールは次のように語っている。「(略)もしも心に^{くわだて}投企をもつならば、それらはひじょうに貴重である。良好な健康にもまして、老人の最大の幸福は、彼にとって世界がまだ目的にみちていることである」と。たしかに阿紗にとっても、ゆきや珠子にとっても、「世界はまだ目的にみちて^{くわだて}いるのである。あそこにも行きたいし、これが食べたいしと、彼女たちはいろいろと「投企」している。彼女たちはそういう言わば精神の姿勢を「好奇心」という言葉で表しているが、心がその「投企」に^{くわだて}満ちている限り、彼女たちはいわゆる「老い」の境涯と無縁であろう。ただ、彼女たちはアンチ・エイジングを実践しているのではない。年を取ることを素直に認めつつ、またそのことを肯定しつつ、しかし好奇心が蠢く限り、精一杯言わば人生を味わおうと言っているわけである。年寄りだから、こうすべきだという考え方はしない。自分が欲しいと思ったら、それを得ようとする。食べ物でもそうである。「三人とも肉が好物だ。年寄りは淡泊なものをなどという養正訓など見向きもしない」と、語られている。

こうして見ると、『いよよ華やぐ』という小説には、老いの理想的な生き方が書かれていると言えよう。あるいは、老いは老いのままに肯定されている、と。この物語は、年を取ることで自分を肯定しようとしていると言える。阿紗の思いとして、こうも語られている、「長く生きるとは、無駄ではなかったという想いが、阿紗の胸にあたたかく湧き上がってきた。／若いときには見えなかったものが、ひとつずつ見えてくるというありがたさがある」と。もっとも、見えなくなってくるものもあると語られているが、それは「見えないでもいいもの、聞かなくてもいいことやなことから遠ざけてくれるという、神仏とやらの恩寵ではなかっただろうか」と。

このような素敵な老いを生きることができるよう、やはり健康に恵まれていたというこ

となど、彼女たちが幸運だったからだということもあるであろうが、その健康も彼女たちの前向きな姿勢と無関係ではないと考えられる。さらに、それぞれの女性には心の支えのようなものがあつたことである。阿紗の場合では、それは俳句である。「どんな苦しい時も、俳句があるから、くぐり抜け、耐えてこられたように思う」と阿紗は思っている。何か一つのことに真剣に関わることが、その人の人生を支えてくれるということであろう。これは老若関わりなく言えることだと思われるが、それがまたその人の老年期をも支えてくれるのではないかと考えられる。

さて、『いよよ華やぐ』という、この小説の題であるが、この言葉は岡本かの子の短編小説「老妓抄」(「中央公論」、1938・11、1939・3)に出てくる短歌から採られた言葉である。この小説は、本名平出園子、座敷名を小そのという老妓が、素朴な素人の生活に憧れて、趣味に和歌や俳句をたしなみ、また家庭電化に積極的だったりする暮らしを始めたとき、出入りの電気器具屋の青年柚木を目にかけ、彼に生活の保証をし、好きな発明を完成させようとする話である。しかし、何の条件も付けられることのない、好き勝手な生活に、当の柚木の方は虚無感に陥ったり老妓に劣等感を持ったりする。老妓は自分の夢を若い男の仕事に対する情熱の中に賭けようとするのだが、柚木はそれに圧迫を感じて幾度も家出をする。老妓はその度に連れ戻し、そして最後に「年々にわが悲しみは深くしていよ、華やぐ命なりけり」という歌を語り手に送ってきた、という物語である。

この老妓と柚木との関係は、小説『いよよ華やぐ』では薫と宗二郎という陶芸作家の男性との関係になる。老妓も薫も一種のパトロンであるが、「老妓抄」とは異なって、薫と宗二郎は最後には性的にも結ばれることになる。薫はまだ60代前半の女性であるが、彼女は次のような人生観を語っている。これは阿紗やゆき、珠子にも同じくある人生観であると思われる。すなわち、「(略) その厭な経験だって、何十年が過ぎてふり返ると、しないよりしてよかったんだなって気がつく時があるのよ」、と。これはこの小説の主題を表してもいる言葉であろう。つまりは人生肯定の主題である。

このようなテーマは大乘仏教的とも言え、なるほど瀬戸内寂聴だと思われる。小乗仏教は人生否定的であるが、大乘仏教もその根底にはニヒリズムがやはり厳としてあるものの、それでも人生を肯定しようとする宗教ではないかと考えられる。その人生肯定の精神から当然のことながら老いも肯定されてくるわけである。性愛も最終的には肯定される。阿紗はこう語っている。「真剣な恋をすれば、その瞬間から地獄が始まりますよ。でもその地獄の責め苦が、わたしくらいまで生きてみると、この世で一番なつかしい思い出となってくるのですからねえ。人間って不思議な動物ですねえ」、と。あるいは、「(略) 恋は性が伴わなくなったって可能ですよ」、と。つまり老人の恋も大いに結構だということである。むしろ、プラトニックラブは「恋の最高の醍醐味かもしれない」とも言っている。老いても恋をすることはいいことで、また恋愛あるいは性愛の地獄も、その地獄も含めて恋は肯定されるべきであると言うのである。むろん、老いてからの恋においてもそうだと言うわけである。

こうして見てくると、老いたからと言って、老人はこうあるべきだというような通念に掬われることなく、好奇心いっぱい生きていくこと、そして好奇心によって積極的に人生の「投企」^{くわだて}をすることの大切さが、『いよよ華やぐ』では語られていることがわかる。この小説では、老いは肯定的に扱われているが、その老いは人生の黄昏時として描かれて

きた老いではないのである。前向きで人生を貪欲に味わい楽しもうとするような老いである。おそらく、そういう姿勢こそ、老人に求められるものであろう。

3

『いよよ華やぐ』と違って恋愛の話はわずかししか出てこないが、やはり同じように前向きな姿勢で生きている老人が主人公の小説がある。田辺聖子の小説であるが、これは〈姥シリーズ〉と言えようか、あるいは主人公の名前を採って〈歌子さんシリーズ〉というふうに言えるかも知れない。『姥ざかり』『姥ときめき』『姥うかれ』『姥勝手』という4冊の本になっているシリーズである。

最初の『姥ざかり』（新潮社、1981・8）でヒロイン山本歌子は登場する。このとき歌子は76歳である。歌子は船場の服地問屋に嫁ぎ、亡夫との間にすでに成人して中年になっている3人の男の子がいる。歌子によれば、亡夫の慶太郎は「無能凡庸」で「足手まといな男」であって、戦災でその服地問屋が焼けた後、問屋を再興したのは「一にかかって私の力によるのだ」ということである。もちろん、忠実な番頭などの協力があったからこそ再興できたのであるが、歌子の言葉通りにやはり歌子の力によるところが大きかったようである。この物語ではいろいろな出来事が起こり、歌子がそれに対処していくのだが、その際の歌子の見解あるいは考え方が痛快で面白いのである。

歌子は今神戸のマンションで一人暮らしをしていて英語クラブや絵画教室に通ったり、お花を習ったり、宝塚歌劇を観劇したりという、けっこう忙しい生活をしている。また自分で習字教室を開いている。子どもや孫たちと一緒に住もうとは全く思っていない。彼女のマンションに立ち寄った警察官に歌子は言う、「なんで一緒に住まな、いかなのですか？ 子供は子供、私は私ですよ。それぞれに生活というもんがあります」、と。とにかく、彼女には経済力があって、それが今の生活を支えているのだが、それというのも「(略)私は、老後のために確実な株を買い貯めたり、定期にしたり、着る物もしっかり揃えてある」からであった。『姥ときめき』でも、「一人ぐらしできるほどの気力と体力、経済力をかねてとりのけておいたのもよかった」と歌子は言っている。

さて、次に歌子語録と言うべきものを挙げてみる。これが面白いのである。『姥ざかり』からは、「なんで年よりなら味噌汁に漬物、ときめるのだ。年よりだって、洋風料理の方が好きな年よりもいるのだ」、と。また、老人は親類づきあいを好むとされていることについて、「それはちょうど、老人、年寄りらは、死者の記憶を大事にし、年忌ごとの法事を尊重するもの、という阿呆な思い込みと一緒にである」、と。野球は無意味だと言う長男の嫁の言葉に対して、「というが、人生で無意味でないものがあろうか。人生はすべて無意味なのだ」、と。また、「七十六で老化があらわれるようではいけない」、など。

『姥ときめき』（新潮社、1984・5）で、歌子も好奇心について語っている。「(略)好奇心がいままでの私をつき動かしてきたのはまちがいない。好奇心があればこそ、仕事もつづけてこられたし、仕事を手放して隠居しても、英語クラブ、絵画教室、書道、といそがしく首をつつこんで、それが仕事になっているのだから」、と。また歌子は、「女は苦勞する。男と社会の双方に苦勞する。しかし男は社会での苦勞しかしないのでその無教養がトシをとるとモロに出てくる」、「とんでもない。あたしゃ幸福ですね。トシとったらとったでより幸せになる」、「(略)私は来年も／（今までにやってないこと、ないことをさがして、

一つずつ、やってみよう！)／と思う」、と語っている。やはり、好奇心を持って新しいものにチャレンジする意欲の大切さが、ここで語られているわけである。そして恋についても、「恋のときめきこそ、人間の体の最高のクスリや」と言っている。この場合の歌子の言う恋は、プラトニックでロマンティックな恋のことである。

『姥勝手』(新潮社、1993・9)では歌子は80歳になっていて、また歌子は腰を痛めてしまい、「人間はふだんはともかく、いざとなった時は一人で生きにくいものである」と、一人住まいの不安も語っている。しかしその精神の姿勢は相変わらず言わばスックとしていて、「そもそも円熟なんてコトバ自体、気に入くない」、「(略)わたしや、^{かくじゅく}角熟したいわ」と語る。そして、「日本の男は、／みなどっか、おかしいーっ／と叫びたい」と言っている。

田辺聖子のこの姥シリーズの山本歌子は、先に見た瀬戸内寂聴の『いよよ華やぐ』のヒロインたちと共通するところが多いと言える。何よりも彼女たちは、〈年寄りだから、老いているのだから〉という理由で、自分の精神と生活を世間の通念による枠組みで縛ろうとしない。好奇心が旺盛で、自分の好奇心の赴くまま、新しいことに思い切ってチャレンジしようとする。まさに、心に「^{くわだて}投企」を持つことは貴重であり、「良好な健康にもまして、老人の最大の幸福は、彼にとっても世界がまだ目的にみていることである」というボーヴォワールの言葉を見たが、来年には何をしようかとワクワクしている歌子にとって、まさに世界は「まだ目的にみちて」いるのである。そして、歌子には社会性がある、精神的にもまた実際の行動においても、自分以外の多くの人びとと繋がっている。あちらこちらに出かけていろいろな人たちと知り合いになり、また彼女には孫ほどの年下のボーイフレンドもいるのだ。

ボーヴォワールがあり得べき老人像として語ったあり方は、日本では瀬戸内寂聴や田辺聖子の小説の中で、初めてほぼその理想通りの老人像が描かれたと言えるかも知れない。

4

さて、ここで注意したいのは、老いの理想像を描いたのが女性作家であり、主人公たちも女性であったということである。歌子は、「日本の男は、／みなどっか、おかしいーっ／と叫びたい」と語っているが、これは彼女の3人の息子のことを念頭に置いての発言である。長男も次男もそして三男も、世間体を過度に気にする男性たちで、歌子に比べれば情けないほどに俗物だと言える。亡夫が「無能凡庸」であり、息子たちも「不出来」だと思っている歌子は、「(略)どうしても、男が女よりエライとみとめたくないのだ」と思っている。残念ながらと言うべきであろうか、もちろんすべてではないが、老いにおいてはどうも男性の方が駄目なようである。

その駄目ぶりを作者自身もどうもしっかりと認識しないままに描かれているのが、渡辺淳一の小説『孤舟』(集英社、2010・9)ではないかと思われる。この小説は、大手の広告関係の会社で取締役にはなれなかったものの、上席常務執行役員までになった主人公の定年後の物語である。大谷威一郎は社内の主流派閥から外れていたために規程通りに60歳で定年退職を迎える。実は、大阪の関連会社に社長として行く話もあったのであるが、その会社は小さく、自分のそれまでの業績に比べて不似合いだと思い、その話を蹴って退職したわけである。しかし、退職後に待っていたのは、為すべきことの無い全くの無為の生活で、妻からも疎んじられるような毎日であった。

たとえば、飼い犬を連れて散歩していると、「見知らぬ人が見たら、朝から暢んびりと犬と散歩する恵まれた人、と映るかもしれない」が、「しかし実態は、行くところがなく、暇で妻に追い出された男に過ぎない」というふうと思う。威一郎には妻と2人の成人した子どもがいて、長男は家を出て生活し、長女は家から会社に通っていた。物語は後半に至って、無為に飽いた威一郎がデートクラブで知り合った27歳の、小西という若い女性と付き合う話を中心になる。ちょっとした恋愛じみた展開である。と言っても女性の方は半分仕事で付き合っているわけである。

もっとも、小西は優しく親切なところのある女性である。その彼女の好意を自分に都合のいいように解釈している威一郎は、彼女を京都旅行に誘おうと考えて計画まで立てるが、今度結婚することになったと彼女から告げられ、あっけなく振られることになる。しかし、威一郎が今の自分は「肩書きも、なにもないんだ」と言うと、小西は「それで、いいじゃないませんか」と言い、その言葉によって威一郎は「よかった、そういわれて、少し自信がでてきたよ」と応え、威一郎なりに「よし、今日から新しく生きていこう」と少し前向きになるところで、物語は終わっている。

ところで、上野千鶴子は『男おひとりさま道』（法研、2007・11）で、リタイアしてもかつての企業社会などでの社会的地位に縛られていて、自らの弱さや現在の力の無さを認めようとししない男性は、結局は周囲から孤立してしまい、不幸な老後を送ることになる、ということを書いていて、精神科医の上野博正も「したたかな老い——挫折をテコにした長期計画のすすめ」（『老いの発見 4 老いを生きる場』（岩波書店、1987・2）所収）という論文で、そういう傾向が強いのは企業社会で出世したエリート男性に多いと述べている。威一郎はその典型例である。だから彼は駄目な老人男性なのだ。もっとも、威一郎は65歳の少し前であるから、現在の老年の規準からすればまだ老人ではないわけであるが、しかし定年退職しているし、年齢もほぼ65歳に近いわけだから、老年に片足が入っている男性と言えよう。次に彼の駄目なところを見ていこう。

自分に親友がいないことについて、威一郎はこう思っている。「稀に親友がいたとしても、社会的地位と、経済力も同じくらいでないとなり立たないが、六十歳を過ぎると、そんなケースはまずありえない。／なんと、男とは孤独ないきものである」、と。たしかにそういう面もあるであろうが、実は本人の友人観がそのような狭いものだから、親友ができないのである。また、何か新しく学び始めようかと思ったときに、「はっきりいうと会社で地位が上がり、周りから一目おかれて評価される、そのためにだけ学び、努めてきたようである」と威一郎は思う。それについて彼にも反省はなくてはならないが、しかし会社時代の姿勢を変えることはしないのである。

また、基会所で一度だけ囲碁を打ったときも、その後に「あそこで一生懸命、囲碁に打ち込んだところで、どうなるわけでもない」と思い、会社時代には囲碁は上役などと親しくなるというメリットがあったけれど、「だがいま、あんなところであんな男とやったところで無駄である。いまさら彼等と親しくなったところで、今後の自分のプラスになるわけではない」というふうと思うのである。損得から物事を考えるという功利主義から離れられない以上、威一郎の老後は不幸である。ユング心理学の第一人者であった河合隼雄は、論文「文化のなかの老年像 ファンタジーの世界」（『老いの発見 2 老いのパラダイム』（岩波書店、1986・12）所収）の中で、人びとが忙しくしているとき、「（略）老人は何もしな

いでそこにいること、あるいは、ただ夢見ていることが、人間の本質といかに深くかわるものであるかを示してくれるのである」と述べ、「(略)「無駄を大切にしよう」と老人の知恵は語る」とも語っている。威一郎はその「知恵」の大切が全くわかっていない男性なのである。

カルチャークラブの雑誌を見ては、「(略) こちらは一流大学を出ているのに、いまさら若者や主婦と一緒にというもおかしなことである」というふうにも威一郎は思う。本当に度し難いほど、威一郎は愚かでつまらない男である。情けなくもなり、また哀れでもある。家の風呂掃除をしても、「(略) それにしても妻や娘が入る風呂を掃除するとは……。／これでは、浴室の掃除係になったと同じではないか」とも思う。「掃除係」でいいではないか、どうしてそれでいけないのだと言いたいが、彼が「掃除係」の人をどのような眼で見ているかもわかるだろう。こういうふうな意識がある限り、威一郎の老後の生活は辛く生きづらく不幸なものとなるであろう。そう思うと、威一郎のことが少々気の毒にもなるが、しかしそれは彼の身から出た錆だと言えよう。

小説の最後で威一郎は、「よし、今日から新しく生きていこう」と思うが、それは可能であろうか。日野原重明は、『豊かな老いを生きる』（春秋社、1995・10）でこう述べている。「若い人の生活、中年の生活、老いの生活、そして老いの姿が別々にあるのではなく、老いの姿は、若い頃の歩き方、生き方、食べ方から、延々とつながっており、同じ道の延長上にあるのだということに気づいてほしいのです」、と。ボーヴォワールも同じ様なことを、たびたび言及した『老い』の中で述べている。すなわち、「(略) 彼は老化による変質を受けながらもかつてそうであった個人でありつづける、つまり彼の晩年は大部分彼の壮年期によって左右されるのだ」、と。おそらく、そうであろう。そして、そうならば、どうも威一郎には老後の新しい人生は難しいのではないかと思われる。

もしも、男性の多くが大なり小なり威一郎的なところを持っているとすれば、男性の老後には厳しいものがあることになるだろう。むろん、威一郎のように出世する人の方が少ないわけだが、それでも家庭の中で権力者であったりすると、やはり威一郎と同じ様な老年期の生活となるであろう。それに比べて、『いよよ華やぐ』の女性たち、姥シリーズの山本歌子は本当に元気がいい。彼女たちは威一郎のようなつまらぬエリート意識も、また人や職業に対しての偏見なども無いことが彼女たちの老年期を輝かせていると思われる。それとともに、彼女たちが健康と経済力に恵まれていることである。もちろん、経済力は彼女たちのそれまでの人生での努力によって蓄えられてきたわけであるが、それにしても羨ましくなるだろう。歌子は、シリーズの最後の『姥勝手』でこう語っている、「(略) 女であって年寄／という存在は、人一ばい金要る。／なんのために？／プライドと自立を守るためである」、と。

たしかにそうであろう。老年期を生きる彼女たちの姿勢には大いに学びたいが、なかなかそうもいかないところもあるであろう。最後にそうもいかない老いを扱った小説と、爽やかな老年期の恋の話を見てみたい。

5

老いの問題は言うまでもなく、自分自身の老いの問題だけでなく、たとえば家族の老いの問題がある。その家族の老いの問題を扱った小説を〈介護小説〉と言ったりする。戦後

で有名なのが、いわゆる痴呆老人の問題を描いた有吉佐和子『恍惚の人』（新潮社、1972・6）である。初老にさしかかる夫婦が84歳の父親を介護する話である。この小説によって痴呆のことが一般世間にも知られるようになって、「恍惚」という言葉は流行語にもなった。もちろん、介護のことを扱った小説は以前にもあり、たとえば先にも言及した川端康成の若いときの作品、満年齢で16歳のときの自分の日記を元にした『十六歳の日記』（『文藝春秋』、1925・8）などもそうであろう。これは盲目のお祖父さんを16歳の少年が介護する話である。

比較的近年では佐江衆一の『黄落』（新潮社、1995・5）がよく読まれた小説である。これは、60歳の夫婦が90代の父親と80代の母親を介護する話である。この父母は主人公で語り手の男性の親で比較的近所に住んでいた。やがて母親の方が自分の息子のことを「これ、弟なんです」とボケ始める。そして、夜寝ているときに夫の首を絞めるということもやり始める。主人公は、父親の昔の浮気相手の女性に対する憎悪が噴出したのではないかと思ったりもする。もっとも、母親は完全な痴呆ではなく、ときどきは正常な意識に戻るという、いわゆる〈斑ボケ^{まだら}〉である。やがて母親は自らほとんど食を断ち、衰弱の内に死んでいく。主人公は、母は自分たちにこれ以上迷惑をかけまいとして、死のうとしているのではないかと思う。実は主人公には、「(略) 父と母が死んでくれたらと願う気持ちが脳裡の片隅に浮かんでくる」ということもあった。

この小説では、介護が介護している夫婦の仲をおかしくすることも語られていて、主人公は義理の父母の介護に疲れている妻に「離婚しよう」と言い、それに対して妻は「(略) あなたは卑怯よ。離婚なんか持ち出して」と応える。また、妻の死後、子どもたちに引き取られた父親はいよいよ痴呆が進んで盗まれてもいないお金を盗られたと言ったり、性的なことをあからさまに言ったりする。結局、父親は老人ホームに入ることになるが、94歳の父はそのホームで80歳の女性と仲良くなり、俳句を嗜んでいた父はその女性に俳句の手ほどきをしたり、また「室内には二人だけで、父と老婆はたがいの耳に口を寄せて何やらむつまじくささやき合っていた」ということもあった。二人のことはホームの中で噂になる。

このあたりの話が〈やはり〉と思わせるわけだが、作家である主人公は、一休宗純が77歳でうら若い盲目の女性である森侍者と知り合い、88歳で遷化するまで彼女との性愛に耽ったこと、また70歳の良寛和尚が29歳の美貌の尼であった貞心と恋を語り合ったことを思い浮かべて、「(略) それが老父の唯一の生甲斐だろうと思うと、ほのぼのとした気持ちも湧いてくるのである」というふうと思う。しかしながら、そのように「九十四歳の人生最後の恋を、小説家である私は賞賛している」ものの、「しかし、息子の私はそれが出来ない。(略) 母のためにも出来ない」とも思っているのである。

小説は何の解決もその方向もないまま、閉じられているのだが、これは介護に纏わる問題、老年期に付きまとう問題を提示しただけの小説と言えよう。重たい問題を投げかけているわけである。さらに重たいのがいわゆる老々介護の問題である。耕治人の小説『そうかもしれない』（晶文社、2007・2）である。これは妻が痴呆になり、夫が介護する物語である。夫婦は同じ年で物語の初めでは79歳で、終わりでは81歳になったとされている。「脳軟化症」になった妻は特別養護老人ホームに入るのだが、夫のことも認識できない状態になる。介護の人に「この方はご主人ですよ」と何度目かに言われたとき、「そうかもしれない」

とはっきりと返事する。小説の題名はここから採られている。妻がそう言っても、主人公は落胆するわけではなく、妻が50年あまりも自分の服の洗濯をしてくれたことをしみじみと感じたり、ホームの浴槽で介護者の二人の女性に体を洗ってもらっている妻を見て、「(略)涙でかすんだ私の眼に、この世ならぬ美しいものになってゆくように思われた」と語られている。

『そうかもしれない』は老々介護という辛い現実が語られているわけだが、介護する者はむしろ介護される人に感謝の気持ちを改めて感じるという話になっている。先の『黄落』とは介護の辛い現実という点においては共通していても、介護側の気持は全く違うのである。

こうして見てくると、老いや老人をテーマにした小説でも、その老いには様々なあり方があることがわかる。もう一つ、老人が主人公の小説に触れておきたい。それは黒井千次の『高く手を振る日』(新潮社、2010・3)で、これは少しロマンティックな物語である。すでに妻は亡くなっている稲村浩平は現在70代に入った男性で、学生時代に妻とともに友人であった稲垣重子(旧姓・瀬戸)と再会する。彼らは以前にも共通する友人の葬式で会ったこともあるのだが、その稲垣重子もすでに夫を亡くしていた。実は、2人は若いときに1度だけ接吻したことがあった。厳密には唇を合わせた回数は2度であるとされているが、それは連続してのものでしたから、やはり1度の接吻と言うべきであろう。接吻したのはもちろん互いに好意を持っていたからである。しかし接吻は偶発的な出来事であったと言え、稲垣重子は接吻の事実など無かったかのように、それ以後は振る舞ったようなのである。

そして、月日が経って2人は会ったのだが、ここで面白いのが浩平の心理である。たとえば、会う約束の数日前からいつもと違う気分になり、また不安感を持ったりする。「久しく身に覚えのない気分だった」と語られている。そして、相手の言動をあれこれと解釈したり、会った後すぐに礼状の葉書を出しておけば良かったと後悔したり、ドキドキときめいたりもして、要するに恋の渦中にある若者と変わらない心理反応をしていることである。何歳になっても、恋をした人は若い時と変わらないようである。結局、重子は自分から老人ホームに行くことにする。2人はその前に、もう1度今度は熱い接吻をする。そして、ともかくもしばらくはお別れだというところで話は終わる。本の帯にあるように、この小説は「七〇歳を越えた男と女の純愛小説」と言えるが、年を取っても条件さえ揃えば、そういう純愛もあるのかも知れないと思わされ、なかなか元気の出る小説になっている。

さて、最後に触れておきたいことは、死の問題である。老いの境涯が一般に寂しくて辛いものだと思われているのは、老いると体力が衰え思考の力も鈍って病気をしがちだということがあるであろうが、やはりより端的には老年期が死と近接しているからだと言える。老人とはもうすぐ死ぬ人だというわけである。たしかに、若者や中年と比べれば死に近い存在である。しかし、死を悲しいもの不幸なこととしてのみ捉える考え方から、私たちは1度抜け出るべきではないだろうか。日野原重明も「(略)死自体をもっと明るい太陽のもとに引き出しでもいいのではないのでしょうか」(『豊かに老いを生きる』)と述べている。たとえば、死を自分の人生の完成として捉えるような見方をしたり、あるいは、自分は死すべき存在だということを、常に自覚しつつ生きるというあり方もあるであろう。

そこで思い起こされるのは、内田百閒である。還暦の翌年から法政大学の教え子たちが、〈百閒、まだ死なないか、〈まァだかい〉〉という意味で、「摩阿陀会」というのを毎年1回

百閒を招いて行うことにしたのである。以後約 20 年間、「摩阿陀会」は百閒の死の直前まで開かれている。面白いのは、この会を始める言わばプレ「摩阿陀会」では百閒の葬式を済ませていることである。これは、死から眼を逸らすのではなく、笑いながら死に向き合って生きていくような老いの人生を、百閒にはしてほしいという教え子たちの思いが込められていたためであろう。また、ちょうど同じ時期から、百閒は計 3 万キロを越える「阿房列車」の旅を始めるのである。これはただ列車に乗って旅に出ることが目的の汽車旅行で、まさに無目的で無駄の旅である。先に河合隼雄が述べた、〈何もしないでそこにいること〉の大切さ、あるいは「無駄」の大切さについて見たが、百閒は還暦を過ぎてからまさにそれを実践したわけである。

百閒を大に見習いたいものであるが、やはり死から眼を背けず、好奇心が芽生えればそれに素直に従っていろいろなことにチャレンジし、〈年寄りらしく〉とか〈老人のくせに〉という世間の通念に囚われることなく、恋心が芽生えれば恋をするべきで、とにかく日々を前向きに楽しもうとして生きていくことが大切だということが、老いを扱った小説から見えてくる。作家の宇野千代は 98 歳の天寿を全うしたが、彼女は最晩年のエッセイ『私何だか死なないような気がするんですよ』（海竜社、1995・12）で、「この年になっても、生きるということは考え方一つで、毎日毎日、なかなか面白く楽しいものです」と語っている。

老いの問題は社会がそれをどう考えるかという問題と大きく関わってくるが、少なくとも個人の心構えとしては山本歌子や阿紗たち、さらに宇野千代のようにありたいものである。

[付記] 本稿は 2013 年 7 月 27 日の本学主催「フェリーチェ文化講座」での講演を論文にしたものである。なお、引用文についてはその初出誌あるいは初刊本を本文中に明記した。